

歩 & 目 足 & ラテス

Vol.68

松山エリアの近代化遺産巡り

…戦災を経てなお語り継がれるもの…

岡崎 直司

タウンツーリズム講座主宰・
ヘリテージマネージャー

司馬遼太郎の小説「坂の上の雲」によつて、明治というポジティブな時代の舞台となった城下町松山。しかしこの街は、残念かな昭和20年7月26日深夜、米軍による大空襲によつて市街地の大部分が被災した。直後は、城山だけが異様に目立つ、いわゆる焼け野が原状態と化した。そうした未曾有の歴史体験を経てなお、遺され守り継がれたモノたちがある。今回は、そうした貴重な歴史遺産を巡る旅。

まずは県庁舎。木子七郎の設計により、昭和4年に竣工した4代目の庁舎はコンクリート建築。構造は、後に東京タワーなどで有名になる耐震構造の父、内藤多伸。当時の流行もあり、中心性のある左右対称、比翼の構成は、ズバリ權威

主義的なスタイルだが、建築は時代を写す鏡でもある。



愛媛県庁 正庁内観

次に萬翠荘。こちらは大正11年、同じく木子の設計にして県下初の本格的RC



萬翠荘

輝かせているとも言えるのだ。そうした隅々にわたる職人技が、この建物の屋根においても、その美しさを一層



旧私立松山女学校正門

(鉄筋コンクリート)造洋館。現在は国重要文化財。この建物の特徴は数々あるが、屋根材に葺かれた天然スレート、玄晶石について少し。建て替えられた伊予鉄道後温泉駅の屋根にも同素材が見られるが、昨今では何よりこの屋根材を有名にしたのはあの東京駅の修復工事である。その素材供給地

城山の麓にある名建築をもう二例。旧私立松山女学校正門と宣教師館。つまりはロープウェイ街にある、現在の松山東雲中学・高等学校である。この門を見て、観光客の多くは、いや地元の人でも少し変わった松山城の城門、位に思ってしまう。通り過ぎる人が過半であろう。

宮城県雄勝町では、出荷直前に東北大地震で被災し、全国からボランティア

が集まることで何とか東京駅の修復が間に合うというドラマがあった。



旧宣教師館(みつばハウス)

丸ビルの設計技師長として来日し、当然ビルや洋館を得意とした彼の作品群の中でも、この門だけは異色中の異色。理由は、当時の松山女学校3代目校長オ



松山測候所

リープ・ホイテにある。松山城東郭に立地する環境配慮から、「全校舎群を城郭型建築に」という指示が出されたのだった。さぞやモーガも面喰らったことだろう。もしご存命なら当時のプランニング経緯の心境を聞いてみたいところだ。他は全て先述の震災で灰燼と帰したが、ここだけが焼け残った。

一方の宣教師館は、その焼土から昭和24年にヴォーリス設計事務所により見事に復興し、現在はその校章から「みつばハウス」と呼ばれ、同窓生や在校生たちの諸活動に利用されている。当時は第6代校長C. S. ジレットの住居でもあった。



愛媛県教育会館

ここからしばらく西へ、北持田町へ行くくと、昭和12年建築の近代和風、県教育会館がある。県内では希少な帝冠様式という時代がかった建築スタイル。同6年の満州事変に始まり、翌年の五・一五

事件、次いで11年に二・二六事件が起き、同13年には国家総動員法である。そんな時代風潮を象徴するのがモダニズム様式の対極にあるこの帝冠様式で、東京の九段会館が有名。教育会館という用途において、まさに皇民化教育の場として相応しい時代の衣が着せられたのに違いない。

その建築スタイルを比較して面白いのが、ほど近くにある昭和3年築の旧松山測候所（現松山地方気象台）。先の建物と違って、こちらはまた時代の切迫感が漂っていない。同じ昭和ながら、こちらは左右非対称以外は塔屋部分の装飾などが明るく、空の青さが映える。文学的表現をすれば、この後しばらくして暗い時代へと天候が急変してゆく。

改修の相談を受け、専門家を紹介し何とか再生修復出来たのが今の姿。意識のバトンタッチリレーが程良く奏功し、スクラップされることなく、こうして目にする事が出来る有り難さを感じる。

最後に、萬翠荘と同じ大正11年建築の旧制松山高校講堂「章光堂」をご紹介して稿を終えよう。こちらは木造なれど、昨春には耐震改修が施され、ドーマー窓も復元、国登録有形文化財としての価値に耐える往年の姿が蘇った。何より玄関を支える8本のみならず、内観の一、二階、その四周に巡る白いトスカナ式円柱の連続が圧巻である。静謐な大空間の中に大正デモクラシーの華やきを感じられ、こうした場で学ぶ情操効果について異論の余地は無い、そう思わせる力がそこにある。



聖アンテレ教会



旧制松山高校 章光堂

近代化遺産をめぐるまち歩きツアー<松山編>、10月4日実施！（28ページ参照）